

『徒然草』の研究 ―第一四二段について―

The Study on the 142th Passage of *Tsurezuregusa*

土屋 博映

Hiroei TSUCHIYA

要旨

『徒然草』には同類の内容の章段が連続する場合が少なからず存在する。それが、はたして後人の思いつきで並べられたものなのか、作者兼好法師の意図によって並べられたものであるかを判断するのはそう容易なことではない。しかし、筆者が今まで論考してきた連続した章段には、やはりその並べ方に意味があり、順序を違えたら、その章段の持つ、魅力・迫力が薄れてしまうように考えられる。本書自体、成立当時の形態をそのまま残しているということは、そう簡単には言えない。古典文学の、書写による変形の歴史は、必ずやつきものだからである。だが、先学者が論じてきたように、本書は大体において各章段が成立順に記されているということがほぼ定説となっており、ここで、同類の内容の章段に、その位置(順序)に必然性があるとすれば、本書は、おおよそ、成立順に並べられているということの、ささやかな一つの証言ともなり、本稿もその一端を担うこと

が出来るはずである。

本稿では、第一四二段(「後段」とよぶ)に、焦点をあてたが、もちろん狙いはその「前段」の第一四一段(「前段」とよぶ)の位置づけをすることにもある。詳細に前段と後段を比較しつつ検証していくと、①両段ともに、東国人が、その外見上からは予想もつかない立派な発言(「一言」)をし、作者が感動していること、②両段ともにポイントとなるのは東国人の発言(「一言」)であるということ、③両段ともにその発言を「一言」という同一表現をしていること、④後段冒頭の一文「心なしと見ゆる者も、よき一言いふものなり」は、従来の理解よりもより強く、前段を意識して記されているということ、などが判明した。こういった事実をもとに前段と後段を検証すると、後段で政治論に発展させる意欲が、前段冒頭の「悲田院堯蓮上人」を書き始めた時から、あったものと判断できる。作者兼好の論理は、現代人の論理と食い違うように思われる場合がしばしばある。たしかに、彼の論の進め方は個性的ではあるが、実は、論理としてずれてはいないこと

が本稿でも確認できた。

結論として、本書後段(第一四二段)と前段(第一四一段)との関係性は非常に強く、時を置かずして、連続して書かれたものだと判断した。最終的には「政治論」を主張する意図で前段・後段は展開しているということを主張した。江戸時代になされた章段区分の弊害は今こそ取り去らねばならないという言葉でまとめた。

一、はじめに

『徒然草』第一四二段は、第一四一段と内容的に類似している。第一四二段は、「心なしと見ゆる者」でも「よき一言」を言うものだという、冒頭の一文から、「ある荒夷のおそろしげなる」が、「子故にこそ、万のあはれは思ひ知らるれ」と言ったという作者の経験談から、「子持ちてこそ、親の志は思ひ知らるれ」という結論を導き出し、さらに「かなしからん親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗みもしつべき事なり」と発展させ、そこから「人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはん事、不敏のわざなり」と、さらに発展させ、最後に「上の奢り費やす所をやめ、民を撫で農を勧めば、下に利あらん事、疑ひあるべからず。」という政治論にまで及ぶ内容である。

これに対し、その前に置かれる第一四一段は、「悲田院薨蓮上人」がもと東国の人間で、「さうなき武者」であり、「声うちゆがみ、あらあらしくて、聖教のこまやかなることわり、いとわかまへずもや」と思っていたところ、同郷の人間の、都人への批判に対し、同調することなく、

筋道をたてて、その考えの誤りを否定したことに、作者は感動し、「多かるなかに寺をも住持せらるるは、かくやはらぎたる所ありて、その益もあるにこそと覚え侍りし」とまとめている。

両段ともに、そのようなよき言動をするとは、表面的には予想もつかない人物が、思いやり深い心を表したことに対する、作者の感動が述べられているところが非常に類似しているのである。この両段が、偶然に置かれたとは考え難く、両段の関連性が強く、作者が意図的に類似の話をとりあげ、並べたものと仮定して論を進める。

第一四二段が「政治論」にまで発展しているのは、その第一四二段にだけ起因するのではなく、第一四一段があつたればこそ、そこまで発展させられたのだということ、つまり、第一四一段と第一四二段は、本来別々に取り扱うべきではなく、まとめて鑑賞してこそ、作者の真意が読み取れるものだということを論証していきたい。

二、第一四二段について

1、全文^①

心なしと見ゆる者も、よき一言いふものなり。ある荒夷のおそろしげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答へしかば、「さては、ものあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらんと、いとおそろし。子故にこそ、万のあはれは思ひ知らるれ」と言ひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かかる者の心に慈悲ありなんや。孝養の心なき者も、子持ちてこそ、親

の志は思ひ知るなれ。(第一段落)

世を捨てたる人の、万にするすみなるが、なべてほだし多かる人の、万にへつらひ、望み深きを見て、無下に思ひくたすは僻事なり。その人の心になりて思へば、誠に、かなしからん親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗みもしつべき事なり。されば、盗人をいましめ、僻事のみ罪せんよりは、世の人の餓えず、寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人、恒の産なきときは、恒の心なし。人、きはまりて盗みす。世治らずして、凍餓の苦しみあらば、咎の者絶ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはん事、不便のわざなり。(第二段落)

さて、いかがして人を恵べきとならば、上の奢り費す所をやめ、民を撫で農を勧めば、下に利あらん事、疑ひあるべからず。衣食尋常なるうへに、僻事せん人をぞ、まことの盗人とはいふべき。(第三段落)

2、本段の検討

本段の冒頭は「心なしと見ゆる者も、よき一言いふものなり。」で、これが本段全体を導く、いわば主題(テーマ)のようにおかれている。

以下、これを含む第一段落を見て行く。

その「心なしと見ゆる者」にあたるのが、続く「ある荒夷のおそろしげなる」である。

その「荒夷」が「かたへ」にむかつて「御子はおはすや」と尋ねたのである。

「かたへ」はその問いに「一人も持ち侍らず」と答えた。

そこで、「荒夷」は「さては、もののはれは知り給はじ。情けなき御心にぞものし給ふらんと、いとおそろし。子故にこそ、万のあはれは思ひ知らるれ」と述べた。これが冒頭の一文に言う「よき一言」である。

子どもを持たないことから、「もののはれは知り給はじ。情けなき御心にぞものし給ふらん」と言い切り、畳みかけて「いとおそろし」と言う。そして、「よき一言」の中心となるのが、「子故にこそ、万のあはれは思ひ知らるれ」であり、有無を言わさぬ結論である。

この発言「一言」について、作者は「さもありぬべき事なり」と、強い同意を示し、そこから「恩愛の道」ならでは、かかる者の心に慈悲ありなんや。孝養の心なき者も、子持ちてこそ、親の志は思ひ知るなれ」と発展していく。

冒頭主題と見られた一文のキーワード「よき一言」は「恩愛の道」「孝養の心」へと、続いていくことになる。

第二段落では、「世を捨てたる人の、万にするすみなる」者が、「なべてほだし多かる人」の、「万にへつらひ、望み深き」を見て、「無下に思ひくたす」ことは「僻事」だという一文から始まる。これは、第一段落の「荒夷のような、愛情などという気持ちはまったくもないと思われる者」が、「子供を持つこと」によって、その愛情を実感する」ということからの流れだが、彼は、第一段落末尾の一文、「孝養の心なき者も、子持ちてこそ、親の志は思ひ知るなれ。」で、本段全体のまとめとほしないのである。

第二段落では、冒頭主題と思われた一文の、明らかな発展があると考

えられる。比較してみれば一目瞭然である。

「心なしと見ゆる者も、よき一言いふものなり」(第一段落冒頭)

「世を捨てたる人の、万にするすみなるが、なべてほだし多かる人の、万にへつらひ、望深きを見て、無下に思ひくたすは僻事なり」(第二段落冒頭)

つまり、第一段落は、末尾の「孝養の心なき者も」の一文によって見事にまとめられている。それだけで、前段の第一四一段とは対応する。

本段での結論を急げば、この第二段落は、第一段落の連想の発展はあるというものの、内容的には相当異質であると言わねばならない。つまり同一の章段だと考えた場合、あくまでも現代人の感覚として、筋道が通らない、つまり論理的ではないということになる。

第二段落冒頭の一文は、あくまでも第一段落との比較の問題だが、主題とするには長すぎる。つまり、第一段落を受けていることは確かである。

「世を捨てたる人の、万にするすみなる」は、出家した人で、万事につけて、関わる肉親がない人のことである。続く、「ほだし多かるひとの、万にへつらひ、望み深き」は、「世を捨てたる人」と対照的な、関わる肉親が多い人のことである。さらに作者は、後者は(生活のため、家族等を養うため)、人にお世辞を使い、欲望も深いと続け、さらに後者を前者が「無下に思ひくたすは僻事なり。」と切り切る。

つまり主体が、「心なしと見ゆる者」から「世を捨てたる人の、万にするすみなる」に転換したのである。これをとりあえず第一四一段と比較

してみると、第一四一段は「悲田院堯蓮上人」であり、彼は同段後半の「この聖、声うちゆがみ」以下の内容から、「心なしと見ゆる者」との関連性が強いことがわかる。

つまり第一四二段が―あくまでも仮定の話だが―第一段落のみで完結していれば、第一四一段、第一四二段を併記したというだけにすぎない可能性が高い。

ところが、第二段落の主体の転換は、大きな変化であり、同一段としては許容範囲を越えているとしか思えない。もちろん前段との併記とは考えにくい。

第二段落を見て行く。続く「その人の心になりて思へば、誠に、かなしからん親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗みもしつべき事なり」は、もちろん第一段落の発展である。「ほだし多かる人の、万にへつらひ、望み深き」に対しての弁護である。

続く「されば」という接続詞には注意しなくてはならない。本書の作者は、基本的に淡々と文を並べあげることにより、淡々と主張を積み重ねていく姿勢であると、筆者は考えている。その姿勢から言うと、「されば」という接続詞は相当な重みを持っていると考えられるのである。⁽³⁾ いわゆる結論(主張)を述べる場合の常套句なのである。続く「盗人をいましめ、僻事のみ罪せんよりは、世の人の餓えず、寒からぬように、世をば行はまほしきなり」は政治論と言っても過言ではない。⁽⁴⁾ おそらく当代の政治家に向けて述べられた発言であろうと思われる。

続いて、「人、恒の産なきときは、恒の心なし」⁽⁵⁾と記されている。これ

は『孟子』の引用であり、続く「人、きはまりて盗みす」はそれを言い換えたものである。そこから、彼の主張、「世治まらずして、凍餓の苦しみあらば、咎の者絶ゆべからず」が導かれることになる。そして、本段落のまとめとなる、「人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはん事、不便のわざなり」へと続く。このまとめは政治論だが、非常に弱い。感情論と言ってもよいくらいである。

続いて、第三段落である。

「さて、いかがして人を恵むべきとならば、上の奢り費す所をやめ、民を撫で農を勧めば、下に利あらん事、疑ひあるべからず」とあるが、「さて」とあることから第二段落をまとめようという意図はうかがえるが、「さて」とはどうにも弱い接続詞である。これから大変な主張をするという姿勢ではない。「いかがして人を恵むべきとならば」も柔らかい表現となっている。続く「上の奢り費す所をやめ、民を撫で農を勧めば、下に利あらん事、疑ひあるべからず」も主張と言うにはあまりにも軟弱である。

第三段落のまとめである「衣食尋常なるうへに、僻事せん人をぞ、まことの盗人とはいふべき」は、第二段落の「盗人をいましめ、僻事をのみ罪せんよりは、世の人の餓えず寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり」に対応している。

結局彼の政治論は、真綿でくるんだように、願望・希望をこめたもので、積極的な改革案を示すようなものではない。

彼は、時の権力者階級に対し、知識人・教養人として、アドバイスす

る立場にあったことは、明らかである。本段も、中世の権力者として東国の誰かから、政治の在り方を問われたものへの回答とすれば、真綿でくるんだような論理、結論も納得はいく。そこに第一四一段との関係が見て取れる。次章では第一四一段を検討する。

三、第一四一段

1、全文⁶⁾

悲田院堯蓮上人は、俗姓は三浦の某とかや、さうなき武者なり。故郷の人の来りて物語すとて、「吾妻人こそ、言ひつる事は頼まるれ、都の人は、ことうけのみよくて実なし」と言ひしを、聖、「それはさこそおぼすらめども、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて心やはらかに、情けあるゆゑに、人の言ふほどの事、けやけく否びがたくて、万え言ひ放たず、心弱くことうけしつ。偽りせんとは思はねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、おのづから本意とほらぬ事多かるべし。吾妻人は我がかたなれど、げには心の色なく、情おくれ、ひとへにすくよかなるものなれば、始めより否と言ひてやみぬ。にぎはひ豊かなれば、人には頼まるるぞかし」とことわられ侍りしこそ、この聖、声うちゆがみ、あらあらしくて、聖教のこまやかなることわり、いとわきまへずもやと思ひしに、この一言の後、心にくくなりて、多かるなかに寺をも任持せらるるは、かくやはらぎたる所ありて、その益もあるにこそと覚え侍りし。

2、本段の検討

冒頭の一文は、「悲田院堯蓮上人は、俗姓は三浦の某とかや、さうなき武者なり」である。

「上人」とあるから、高僧を意味する。これに対し、「俗姓」の「三浦の某」は東国の、いわゆる「荒夷」を意味し、「さうなき武者」から、さらに「荒々しき人物」が想像される。この真逆にあたる主語と述語の関係が、以下の内容の中心となっていく。

「故郷の人の来りて物語す」ということは、東国の粗野な人間がやってきて上人に話をしたというのである。「故郷」とは東国の「三浦」のことであろう。その語った内容が続く。

「吾妻人こそ、言ひつる事は頼まるれ、都の人は、ことうけのみよくて、実なし」は、東国人の、都人批判である。東国人は、約束は守る。しかし、都人は調子よく引き受けるが、誠実に対応しない、というのである。この同郷人の発言に、上人はどう回答するか。普通なら同調するところである。作者もそれを期待させているふしがある。

長い回答が続く。まずは回答の冒頭から。

「それはさこそおぼすらめども、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず」

上人は「それはさこそおぼすらめども」と一旦は、同郷人を認め、接続助詞「ども」でそれを否定していく。東国人をほめる同郷人に対し、都人は「人の心劣れりとは思ひ侍らず」と弁護する。

上人はさらに続ける。「都人は」なべてこころやはらかに、情けあるゆゑに、人の言ふほどの事、けやけく否びがたくて、万え言放たず、心弱くことうけしつ」と弁護する。都人は心穏健で、情があるので、他人に対し、きつぱりと断れなく、気弱く引き受けてしまう、というのである。

さらに、「偽せんとは思はねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、おのづから本意とほらぬ事多かるべし」と、都人への弁護を続ける。「乏しくかなはぬ人」とあるのには注目したい。上人のこの発言を信ずるならば、一般の都人は貧しいということになる。

続いて、「吾妻人は我がかたなれど、げには心の色なく、情おくれ、ひとへにすぐよかなるものなれば、始めより否と言ひてやみぬ」と、東国人との比較をする。東国人について、「心の色なく、情おくれ」とあるのには注目したい。上人のこの発言によれば、東国人は、やさしさがなく、情感が劣っているということになる。

「にぎはひ豊かなれば、人には頼まるるぞかし」と、東国人のまとめをする。「にぎはひ豊か」とあるところに注目したい。上人のこの発言によれば、東国人は、経済的に豊かであるということになる。

その上人の発言を受けて、以下、作者の評価が述べられる。

①とことわられ侍りしこそ、②この聖、声うちゆがみ、あらあらしくて、聖教のこまやかなることわり、いとわきまへずもやと思ひしに、③この一言の後、心にくくなりて、多かるなかに、寺をも住持せらるるは、かくやはらぎたる所ありて、その益もあるにこそと覚え侍りし。(※

①②③は筆者が便宜的に番号を記したものである)

長い評価なので、三つに分けて考えてみたい。

①の「侍りし」の「し」によって、作者は直接上人からこの発言を聞いたことがわかる。

②の「この聖(上人)」の声が東国なまりで、荒っぽいことから仏教の細かな道理などはわかっていないだろうと、作者が、ずっと上人に偏見を持っていたことがわかる。

③の「この一言の後、心にくくなりて」によってこの上人の発言の内容により、作者は上人への偏見を改めたことがわかる。またそれ以下の発言によって上人が寺の住職となっているのは、心のやさしさがあって、そのためなのだろうと、作者が、気が付いたこともわかる。

本段の構成について確認しておく。

(1) 冒頭一文↓徳の高い「堯蓮上人」が東国の出自で、もとは「さうなき武者」である。

(2) 「故郷の人」の発言↓「東国人」を肯定し、「都人」を否定する。

(3) 「上人」の発言↓「都人」を肯定し、「東国人」を否定する。

(4) 作者の判断(評価)↓「上人」についての徳の高さに疑いを抱いていたが、「この一言」によって、その疑問が氷解し、徳の高さを認めることになった。

補足すれば、冒頭の一文中、「上人」が「東国人」であるという、表面的には相いれない内容を主部と述部においたのは、作者の意図的なしわざと言えよう。本当に中身も「上人」なのかという疑いを暗示している

と思われる。

「故郷の人」は「上人」の引き立て役である。「都人」への発言は都人の悪口であり、否定である。誰もが、上人は当然その口車に乗ると思っただことだろう。

ところがあにはからんや、「上人」は口車に乗らないどころか、「都人」を肯定し、「東国人」を否定する。それも感情的ではなく、論理的に、筋道立てて、淡々と「都人」を肯定する理由と、「東国人」を否定する理由を説明している。その結果、作者の「上人」への疑いは晴れたということなのである。

以上の構成と補足から、本段の中心は、「上人」の発言にあることは明らかである。それは「この一言の後、心にくくなりて」から明確である。

さてそうすると、次に位置する「第一四二段」とはどのような関係になるのか。次章で検証することにする。

四、前段と後段の検証

『徒然草』には類似の内容の章段が連続することが多い。これはおそらく意図的に編集したものと仮定して論を進める。その際、連続する段のそれぞれの意味は何か、どの様な位置(価値)を持っているのか、ということをこれまでにも具体的に論証してきた。それに加えて、現在の243段(プラス序段)という章段の区分について、はたしてそれではないものか、論じてきた。相も変わらず江戸時代の学者の区分を旧態依然として利用し続けるというのは納得がいくものではない。基本にたちか

えって、章段区分についても研究を続け、疑問をなげかけてきた。本稿もその一連の流れの上になつたものである。⁽⁷⁾

第一四二段を中心はおくが、もちろん第一四一段も射程にいられている。

この二つの段を整理しておく、次のようなことが言える。確認だが、便宜上、「第一四一段」を「前段」、「第一四二段」を「後段」と呼ぶ。

(1) 両段ともに類似の内容である。

(2) どちらも東国人(荒夷)で、外見からは予想もしない「やはらぎたる所」(前段)「慈悲」(後段)をもっている。

(3) 前段は高德の僧(悲田院葬蓮上人)、後段は、いかつい東国人(荒夷のおそろしげなる)の発言を中心としている。

(4) 前段の上人の発言は、東国人の発言に触発されたもので、詳細に論理的に筋道をたてて、都人と東国人を比較し、都人を肯定している。

それに対し、後段は、東国人が仲間に関いかけ、その回答から、自己の主張を積極的・断定的に述べるものとなっている。

(5) どちらの発言も「一言」としてまとめられている。前段の「一言」は長く、説明的で淡々としている。後段の「一言」は短く、断定的(力強い)である。

(6) 前段は上人の発言から上人の価値を認めることで終わっているが、後段は東国人の発言を肯定した第一段落から、さらに第二段落、第三段落へと作者の考えは発展していく。

(7) 後段は、第一段落のキーワード「親の志」から、第二段の「世を捨てたる人」が扶養家族の多い人の「へつらひ、望み深き」を非難して

はいけないことを述べ、そこから「されば」と接続詞で強調し、盗人を罰するよりは、世の中を治めることを優先すべきだと主張する。

(8) 後段の第三段落は、「上の奢り費す所をやめ、民を撫で農を勧め」と政治論に発展させている。

(9) 後段の第三段落のまとめは、「衣食尋常なるうへに、僻事せん人ぞ、まことの盗人とはいふべき」となっており、政治論とはいうものの、ストレートな表現をさけている。

(10) 「僻事」という単語が、第二段落に2つ、第三段落に1つ出現し、両段落の親近性を思わせる。なお「僻事」という単語は、本書全体で6例存在するだけである。⁽⁸⁾

以上の10項目から、次のようなことが考えられる。

(1) と(2) から、前段と後段は、意図的に並べたのではないか、ということが言えそうである。

本書において、同類の内容の章段が連続することがあるが、それらは、おそらく作者が意図的に並べたもので、各章段は独立せずに、有機的に関連を持ち、その関連性がひとまとまりとなり、ある主張をしているように推定される。これは印象批評ということではなく、かなり実証されそうな仮説としておいてよいと思われる。

(3) は、「上人」(高德の僧)の発言(「一言」)が中心で、論理的で長文で、内容に重みがあり、説得力がある。前段のまとめで、作者は、「この聖、声うちゆがみ、あらあらしくて、聖教のこまやかなることわり、いとわきまへずもやと思ひし」であったのが、「この一言」の後、「こ

ころにくくなりて、多かるなかに寺をも住持せらるるは、かくやはらぎたる所ありて、その益もあるにこそと」思われるようになったと述べている。当然ながら、「この一言」に重きがあるのである。

(4) は、「上人」の発言から、「心なしと見ゆる者(東国人)」の発言へと変わる。しかもこの東国人には、さらに「ある荒夷のおそろしげなる」という修飾語がついている。さらに「かたへ」に積極的に話しかけるといふ内容である。会話そのものは短く、ちよつとしたやりとりしか見えないが、以下のように、ずばりと核心をついた会話のやりとりになっている。

「御子はおはすや」(荒夷)

「一人も持ち侍らず」(かたへ)

「さては、ものあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらんと、いとおそろし。子故にこそ、万のあはれは思ひ知らるれ」(荒夷)

この発言は、後段冒頭の「よき一言」にあたるわけだが、この短い発言の中で、「荒夷」には似つかわしくない表現が連続するところが作者の腕の見せどころであろう。「ものあはれ」とは平安貴族の好んだ言葉である。これを言わせている。さらに「情なき」は前段の上人の発言の「情ある」と関連するだろう。さらに「おそろしげなる」荒夷自ら、「かたへ」に対し「いとおそろし」と表現させているところがおもしろい。

この荒夷の発言を受けて、作者は、納得のいったときの常套句「さもありぬべき事なり」でまとめている。⁹⁾

(5) は、前段の「一言」は「この一言」でまとめられ、後段冒頭の

「よき一言」へとつながっていく。後段冒頭の一文は、前段を強く意識

しているものと考えたい。「よき一言」が「この一言」を受けているのは明らかだが、「心なしと見ゆる者も」の「も」も前段を意識していると考えたいのである。つまり「上人」と同様に、というニュアンスである。

これが「は」であつたらどうか、並列すればその違いは一目瞭然である。

「心なしと見ゆる者も、よき一言いふものなり。」なら前段を受けている。

「心なしと見ゆる者は、よき一言いふものなり。」なら座りの悪い表現になつてしまふ。

もしも前段と無関係で、独立していると言うのなら、つぎのように「だに」を使うべきところだろう。

「心なしと見ゆる者だに、よき一言いふものなり。」

(6) は、後段が前段と強く関連するのは、すべてではなく、第一段落だけということである。前段の上人は都人と東国人を一般論でとらえたが、後段の荒夷は、子と親という「恩愛の道」を主張したのである。

(7) は、(6) で「恩愛の道」を述べたことを受けて、親子の情愛は、「盗みもしつべきなり」と断定する。そこから政治論へと発展していくわけである。

(8) は、第三段落で、政治論のまとめである。第二段落では接続詞「されば」を用い、第三段落は「さて」と、接続詞を有効に用いている。

(9) は、本来の政治論の主張なら、「いかがして人を恵むべきとならば、上の奢り費す所をやめ、民を撫で農を勧めば、下に利あらん事、疑ひあるべからず。」でまとめてしかるべきである。それでも相当やわからか

な表現となっているが。作者の政治論の、真のまとめは「衣食尋常なるうへに、僻事せん人をぞ、まことの盗人とはいふべき。」であった。これは政治をつかさどる者にはなく、民衆への提言となってしまうて、真の政治論とはいいがたい。⁽¹⁰⁾

(10)は、後段の第二段落と第三段落に、本書では特別扱いの単語「僻事」が3箇所が存在するところに、関連性の深さが見られるということである。つまり、第一四二段に属してとらえているが、異質な要素を相含んでいるのではないかということなのである。

五、結論

本稿では、第一四二段（後段）に、焦点をあてたが、もちろん狙いはその「前段」の第一四一段の位置づけをすることにもある。詳細に前段と後段を比較しつつまとめいくと、①両段ともに、東国人が、その外見上からは予想もつかない立派な発言（「一言」）をし、作者が感動していること、②両段ともにポイントとなるのは東国人の発言（「一言」）であるということ、③両段ともにその発言を「一言」という同一表現でまとめていること、④後段冒頭の一文「心なしと見ゆる者も、よき一言いふものなり」は、従来の把握よりもより強く、前段を意識して記されているということ、などが判明した。こういった事実をもとに前段と後段を比較しつつ、検証すると、後段で政治論に発展させる意欲が、前段冒頭の「悲田院堯蓮上人」を書き始めた時から、あったものと判断できると、作者兼好の論理は、ややもすると、現代人の論理と食い違うように

思われる場合がしばしばある。確かに、彼の論の進め方には彼なりの個性があるが、実は、論理としてずれてはいないことがわかる。

結論として、本書前段（第一四一段）と後段（第一四二段）の関係性は非常に強く、時を置かずして、連続して書かれたものだとは判定する。「政治論」を主張する意図で前段・後段は、強い関係で、つながり、展開しているのである。江戸時代になされた章段区分の弊害は今こそ取り去らねば、本書の本来の姿が見えてこないだろう。

注

(1) 本文は『日本古典文学全集』（小学館）による。以下、『全集』とよぶ。なお、『全集』の頭注には次のように記されている。

「前段に続いて、東夷の意外な善言を語り、人民の心情に参入することによって、罪人をつくる悪政の批判に及んでいる。『孟子』の言葉に基づいているけれども、兼好の発想は政治論ではない。子を持つもの、係累を捨てがたい常人の心理に分け入った立論であるところに独自性がある。政治論としては、普通の撫民勸農思想で、孟子の立場から特に進み出ているとはいえないけれども。」

(2) 本書に「さも」の用例は次の六例。いずれも文章末で、筆者の同感（納得）を示す表現として用いられている。

「さも覚えぬべし」（第五段）

「さもあらんかし」（第八段）

「さも覚えぬべけれ」（第二五段）

「さもあるべき事也」（第三四段）

「さもありぬべき事也」(本段)

「さも有りぬべき事也」(第一五四段)

(3) 本書に「されば」は十九例ある。基本的に前後を因果関係で強く関係づけ
ている。

(4) (注1)にあるように、安良岡氏は「政治論」とは言わず、「悪政の批判」
としている。

(5) 『孟子』(梁惠王章句上)には次のようにある。

「恒の産なければ、因って恒の心なし」

(6) 『全集』頭注には次のように記されている。

「都会人である兼好が、東国武士出身である上人の、思いのほか柔軟な言葉に
よって、証人に対する評価を改めた話である。東国人が剛直で心情のこまやか
さに欠けるといふ、当時の都人に一般的な見解が、兼好のものであったことは、
前の『荒夷』についての話によっても明らかである。何回か関東に行き、関東
に滞在したにしても、しよせん兼好は都会人であり、貴族社会の一員であった。
ただこの場合、兼好は個別的に観察することを忘れてはいない。」

(7) 連続する章段の検証として、筆者は次のような論文を著している。

『徒然草』研究―第一三五段について―(跡見学園女子大学人文学フォーラム
第12号)

『徒然草』研究―第一三七段について―(跡見学園女子大学文学部紀要 第四
十八号)

『徒然草』研究―第一三六段について―(跡見学園女子大学文学部紀要 第四
十九号)

『徒然草』研究―第五八段について―(コミュニケーション文化 第10号)

(8) 本書には「僻事」の用例が六例ある。本段以外の三例は次のようである。

「おろかなる人とも、僻事する人とも云ふべし」(第二二三段)

「僻事せんとてまかる者なれば、いづくをかからざらん」(第二〇九段)

「鶴をかひ給ひけるゆへにと申すは僻事也」(第二二三段)

(9) (注2)で述べた。

(10) (注4)で述べた。